

コラム1 桜島の崩壊地形

火山では時に大規模な崩壊がおこり、大災害が発生することがある。1980（昭和 55）年、北米のセントヘレンズ火山で発生した大崩壊は、崩れた山体が黒煙とともに瞬く間に広がっていく様がテレビでも放映され、山体崩壊の凄まじさを強烈に印象づけた。日本では 1792（寛政 4）年の雲仙・眉山の崩壊が有名である。噴火の末期に発生した群発地震により、島原市の南方にそびえる眉山が大規模に崩壊した。海に突入した崩壊土砂は津波を引き起こし、有明海沿岸一帯を襲った。この津波で沿岸の約 15,000 人が死亡したが、これはわが国の噴火災害では最悪の記録である。

桜島火山でも山体崩壊の記録があるのだろうか？今のところ海にまで達する大規模な崩壊の証拠は見つかっていない。大正噴火の始まる前日には、前兆地震に伴って北岳の斜面で崩落が続いたが、幸いなことに、大きな崩壊には至っていない。そのため大規模な崩壊地形はないものと思っていたが、あるとき北



写真コラム1-1 北東側から見た北岳の火口
(提供：海上保安庁第十管区海上保安本部)

岳の火口の縁がずれて二重になっていることに気がついた。写真コラム1-1の左奥から手前やや右側にかけて、火口の縁が左手前側にずり落ちているのが見える。崩壊面も新鮮に見えるため、それほど古いものではなさそうだ。そこでまず大正噴火が始まった1月12日の夜に発生した激しい地震（M 7.1）が原因ではないかと疑った。しかし大正噴火前に作られた5万分の1地形図にも、この二重のリムが描かれている。そうすると安永噴火時かそれ以降に形成されたものであろう。現在は調査ができないので、いつのできごとだったのかは特定できないままである。もし崩れ落ちていたら、錦江湾一帯に大災害をもたらしたかもしれない。

もう1つの例は湯之平と西に隣接するフリハタである。両者とも溶岩ドームであるが、湯之平は瓢箪（ピーナッツ）型をしており、フリハタは凹凸にとんだ山体である。あたかも湯之平山体の西部が崩れ、その先にフリハタが形成されたよう地形である。しかし溶岩ドームの単純な崩壊にしては、フリハタの体積が大きすぎる。おそらくそこにも別のマグマを噴出した火道が存在したと思われる。また崩壊といっても、ずるずるとゆっくり移動したのであろう。

不思議なことに、大正噴火当時と現在ではこれらの山の名前が違っている。当時は高い方から順に、湯之平、サンボンカキ、フリハタと呼ばれていた。しかしどういう訳か、現在では湯之平が春田山と呼ばれ、サンボンカキが湯之平に改名され、フリハタはサンボンカキではなく名無しの山となってしまった。ちなみにフリハタは噴火直後に火口探索に出かけた九大生らにより「大学山」と命名された場所らしい。本報ではとりあえず「フリハタ」の名を使っている。

コラム2 スレッド レース スコリア

鹿児島県立博物館には大正噴火で放出された奇妙な軽石岩塊が展示されている。説明にはスレッド レース スコリアとある。極端に発泡した軽石状の岩塊で、直径が2 mもある巨塊である。この岩塊は、当時、鹿児島女子師範学校の教師をしていた山口鎌次（後に島根大学教授）が湯之平の東斜面で発見したものである（写真コラム2-1）。野外ではパン皮状の亀裂構造が残っていた。いかにももろそうだったので、人夫を雇い慎重に運搬したそうだが、やはりあちこちに当たり角が崩れ、博物館についた時には表皮の構造はなくなっていた。

山口がこのような岩石を発見したのは、篠本二郎（第七高等学校講師）がみごとなサンプルをもっていたのを見て、必死に探し回った結果である。また近くの溶岩中から溶けかけた花崗岩片を2つ見つけている。彼はそれらサンプルを詳しく研究し、スレッド レース スコリアは花崗岩がマグマの熱で溶融し、噴火で放出された際の減圧発泡により形成されたものと推定した。大正噴火で花崗岩が放出されたとの記録は他にもある。たとえば金井眞澄（鹿児島高等農林学校助教授）は有村方面の溶岩や軽石中に、また西側の火口付近にも産出すると記載している。また噴火直後に島中の探索をした諸岡存（九大医学部学生）は、北岳と南岳の鞍部に大きな花崗岩が2～3個落ちているのを、また南岳の旧噴火口の縁にも桃色をした花崗岩が火山灰に埋まっているのを見つけている。なお3万年前の始良カルデラ噴火の初期に噴出した大隅降下軽石の中にも、花崗岩片が見出される。この軽石の噴火口は、現在の桜島と同じ位置であった。このように現在の桜島の地下には、高隈山付近に産出する花崗岩と類似の岩体が分布しているのかもしれない。

本来のスレッド レース スコリアは、高温で低粘性の玄武岩質マグマの一部が極端に火山ガスに濃集し、泡状になって噴出したものである。ちょうど石鹸水にストローを入れ、ぶくぶくと泡立てた状態がそのまま固結したと思ってもらえばよい。学名は“thread-lace scoria”あるいは“reticulite”である。世界で最も軽い岩石で、密度は0.3 g/cm³ほどである。シラスの母体である軽石は流紋岩質で白っぽく、長く伸びた気泡に富むが、その密度は水（1 g/cm³）よりやや小さい程度である。通常の軽石は水に何ヶ月も浮くことができ、海流によって何千キロメートルも移動することがある。では世界で最も軽いスレッド レース スコリアはどのくらい浮かんでいられるのだろうか？意外にも水に浮かべるとすぐに沈んでしまう。気泡間の壁が非常に脆くあちこち破れており、水がすぐに浸透するためである。



写真コラム2-1（提供：産業技術総合研究所）

コラム3 火口をのぞく

活動している噴火口をのぞいてみたい！そのような衝動をもつ人々がいるのは昔も今も変わらない。最近では噴火がおこるとすぐに火口周辺警報が出され、誰もそばに立ち入れなくなる。しかし大正噴火当時はこのような規制がなかったため、噴火口を見に行っていた人々もいた。

その第一陣は第七高等学校の生徒7名と大阪毎日記者が組織した決死隊であり、1月15日に桜島にわたり、なんとか西側の火口に近づき、「覚えず万歳を三唱して」辛くも帰来した。一行が上陸した日は、西側斜面一帯が真っ赤な噴石に覆われた13日夜の大噴火から2日も経ってはいなかった。そのため、彼らの中には火傷を負った者もいた。

第二陣は九州医科大学の医師内田と学生2名（諸岡・長谷）および大阪時事の山脇特派員の4名で、17日の夜中に桜島にわたり、18日の早朝に火口を眼下に望める地点まで登った。諸岡は「噴火口としては、中央に大きなものが一つあるが、驚くべきことには、その周囲に、まるで、蜂の巣のように無数の小噴火口があつて、その何れからも、爆発噴煙している。更に驚くべき光景というのは、大きな噴火口の上に、見たところ、八畳敷位もありそうな、大磐石が蓋をしていて、それは噴出のたびごとに、十間位も高く押しあげられては、またもとに降って行く事であった。その物凄い事、流石無鉄砲の吾々も、肌粟するの感があつた」と記している。マゴマゴしていると窒息しかねないので、急いで下山したが、その場所を記念するために「大学山」と命名した。その場所は定かでないが、湯之平の西隣りのフリハタのことらしい。九大医学部のメンバーは桜島噴火の報に接し、災害ボランティアのために急遽駆けつけたのであるが、同時に島内をくまなく探索し、詳細な記録を残している。

第三陣は鹿児島新聞の記者（牧暁村）らであり、22日の火口の状況を新聞に掲載している。彼らは九大生らよりもさらに火口に近づいたらしく「目前三十尺許にしてその溶岩の一ヶ所が、今しも真紅の色をなして焼け開くよと見るみる、凄まじき大音響めりめりと地軸を打震わし、数十門の大砲を同時に打放したるよりも大なる爆音を発し、山嶽をも打倒しぬべく、猛然として岩石の中より九天に突出した」と迫力にとんだ記述となっている。さらには、立ち昇る噴煙よりも高く放出された火山弾や岩塊が元の火口内あるいはその周辺に落下し、やがて沈静化する、このような爆発が5分おきくらいに繰り返すと記している。この記述をある雑誌で見つけた小藤文次郎は、これこそが自分が見たいと思っていた現象だと大喜びし、彼の論文中にスパター噴火として詳述している。今日の知識ではストロンボリ式噴火に分類されるのであろう。

諸岡も牧も、噴火口は単独ではなく、溶岩中に蜂の巣のように無数に存在すると書いている。このような小火口は爆発が終わるとすぐに溶岩に覆われてしまい、その痕跡すらわからなくなる。今となつては、どんなに詳しく調査しても当時の火口の状況はわからない。探検隊の行動はたしかに無謀で危険きわまりないものであったが、彼らの残した記録は、火山を研究する者にとっては貴重なデータとなっている。

コラム4 小藤文次郎の野帳と一緒に保存されていたスケッチ帳

小藤文次郎は、東京大学初代地質学教授ナウマンに教わった地質学科第1回卒業生である。卒業後ドイツに留学、当時最新の記載岩石学を学び、帰国後日本人最初の地質学教授となった。いわばわが国における近代地質学の祖である。そのため、東京大学理学部地質学教室（現大学院理学系研究科地球惑星科学専攻）には小藤記念室が置かれ、銅像と共に、蔵書やフィールドノート（野帳）類が保管されていた。

小藤は桜島大正噴火に際して2回現地調査に来ており、そのフィールドノートが残されている。創立当初の東京大学はお雇い外国人教師による外国語の講義だったから、小藤も英語でノートをつける習慣だったらしい。第1回目の調査は桜島爆発の翌日には出発したようで、1月13日から書き始められている。14日には「14th Jan. On train in 山陽 line」とある。地名や人名などはわかりやすいよう漢字を併用している。小藤のフィールドノートの特徴は、每晚その日の観察事項や考えたこと・仮説などをキチンと文章化していることである。確かに調査しっぱなしではなく、そのようにすれば考えも整理できるし、論文を書く際、記載の章ではそれを転載するだけで済む。このやり方は大いに見習うべきであろう。その部分に大きく赤鉛筆で×印が書かれていることがある。どうも論文に引用して使ったという意味らしい。

このノート2冊の他にスケッチブックが5冊見つけた。小藤が現地に着く以前からのスケッチがあるから、小藤の描いたものではない。篠本二郎宛の葉書が貼り付けられているので、第七高等学校（現鹿児島大学）地質学鉱物学講師の篠本二郎からもらったものかも知れない。これは1月12日午前8時30分のスケッチから始まり「南嶽ノ頂ヨリ細キ二條ノ蒸氣昇リ…」とあるから、前兆現象を観察していたことになる。篠本は、測候所の「桜島に噴火の恐れなし」という見解に反対して、噴火数日前からの有感地震も火山性地震だと主張していた人物である。黒田清輝や山下兼秀ら画家の絵も残されているが、科学者の目を見た観察スケッチは貴重である。



図コラム4-1 小藤野帳、桜島調査の第1頁



図コラム4-2 スケッチ帳の1頁（熔岩大噴出）

（図コラム4-1、図コラム4-2

提供：東京大学理学部地球惑星科学科図書室）

コラム5 七高英語教師シュワルツ氏撮影の写真

わが国において、火山噴火災害を写真に残したのは1888年（明治21年）の磐梯山噴火が最初である。当時に比べると大正時代には写真機（カメラ）はかなり普及した。とはいっても、アマチュアで持っている人は上流人士だけだったのであろう。職業写真技師の撮影した桜島大正噴火の写真絵葉書等はかなりたくさん流布しているが、撮影者がはっきりしていないし、原板も残っていない。撮影者が特定できて写真乾板が残っているのは、東京帝大森房吉教授撮影（国立科学博物館所蔵）と鹿児島女子師範山口鎌次氏撮影（産総研所蔵）および垂水村（現垂水市）の郵便局長宮原景豊氏撮影の写真（今回鹿児島県立博物館に寄贈）くらいであろう。



写真コラム5-1 黒神埋没鳥居

その他に、第七高等学校造士館（現鹿児島大学、以下七高）英語教師のウィリアム・レオナード・シュワルツ氏が撮影した写真乾板が鹿児島県歴史資料センター黎明館に所蔵されていることがわかった。氏は1910年（明治43年）～1914年（大正3年）の間七高に勤務しておられた。七高は島津氏の居城鶴丸城址にあったが、後身の鹿児島大学が郡元に移転した後、明治維新100周年を記念して、跡地に黎明館が建設された。氏の令嬢カリフォルニア在住のミューラー夫人が、父の勤めていた七高跡地に博物館が建設されたというので、国際ソロプチミスト鹿児島の仲介で、1993年（平成5年）に寄贈してくださったものである。全部で70点ある。その中には外国人と思われる人物が写っているものが2点含まれている。恐らくその方がシュワルツ氏だと思われる。もちろん、噴煙や降灰状況なども撮影されているが、その他、火山活動の分類図（DIAGRAM CHART of Volcanic Activity）のような教科書の挿図や山下兼秀画伯の描いたスケッチの複写などもある。



写真コラム5-2 溶岩上を歩く人物



写真コラム5-3 写真乾板贈呈式

（写真コラム5-1、写真コラム5-2、写真コラム5-3 提供：鹿児島県歴史資料センター黎明館）

コラム6 1914（大正3）年桜島噴火の義援 -義援募集をしたさまざまな団体-

鹿児島新聞社は大正桜島噴火の義援金募集を逸早く立ち上げた。1914（大正3）年1月13日1面に義援募集の広告を打ち出している。新聞社などのメディアが義援活動を行うはじまりは、1885年（明治18）大阪大洪水と思われる。その後、全国の新聞紙上で報道されるような大災害については必ずといってよいほど義援募集がなされ、義援者の住所・氏名、義援額が紙上で公表されるようになる。もちろん、災害だけでなく、一般の人々がその事業に関心と共感を持つような問題には義金と称して広く社会から金を募り事業を推進するという発展もみられた。したがって、大正期にはこうしたことはそれほど珍しいことではなくなっていた。

さて、大正桜島噴火の場合、罹災者が周辺の町村に一時的に避難したが、その人たちの救護に村や町は奔走し、青年団、婦人団体は炊き出しなどの労力を提供する他、義援募集に応じ、それらが地域の救護費用に当てられた模様である。鹿児島新聞紙上で、「県取扱分」として義援者、義援・物資が掲載されているのはこうした救護費用に当てられたものと推定される。義援に限らず、米、甘藷、大根漬、梅干、手拭など罹災者の生活維持のための物資も多く寄せられ、紙面に掲載されている。現品がそのまま供給されているので、義援総額としては数値で示されていない。鹿児島県内では川内実業倶楽部が独自に義援を集めたが、この団体が募った金額は1月28日段階で3千円余に達した。

当時の大富豪であった三井、三菱は10万円の義援を申し出ていることが1月16日付け紙面で報じられた。また、義援募集の全国区的団体も活動した。1913（大正2）年末にすでに立ち上げつつあった東北地方の凶作を救済するための義援団体が、桜島噴火に遭遇して「東北九州救済会」と名称を改めて、救済会を結成している。以下では、鹿児島新聞の紙面に掲載された義援者数、義援額などの推移から、社会的関心がどのように形成されていくのかを推測してみることとする。

(1) 『鹿児島新聞』の義援募金高推移



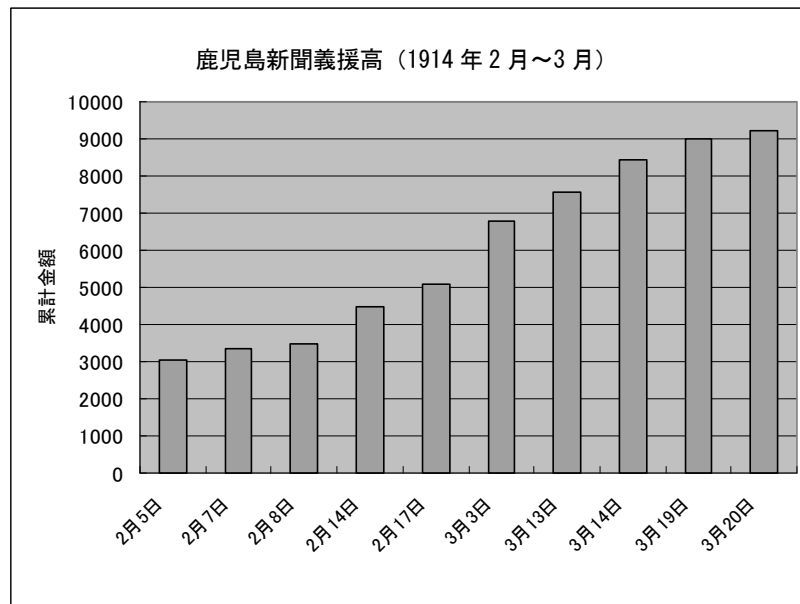
図コラム6-1 義援募集

出典：鹿児島新聞

最大の噴火が起きた1月13日付けの『鹿児島新聞』には左のような義援募集が掲げられた。

義援は一口10銭以上、集まった義援は当局（鹿児島県）に委ねるという2つのことが述べられているが、義援した人々の名前、住所、金額が紙面に掲載されることはこの当時すでに慣例化していた。義援募集広告を掲載した1月13日付けの紙面では鹿児島新聞自身が100円を義援する旨報じられている。第1回の義援者名簿が掲載されるのは1月18日である。金1円～10円の範囲内で約60名ほどである

(紙面の汚れで判読しがたい部分がある)。翌日の紙面では西本願寺内8名(金額50銭～5円)などがまとまって掲載されている。3月31日までに31回の義援者名簿が掲載され、累計義援額は9,221円であった。1月中は累計金額が示されず、義援者、義援額のみが掲載されたが、2月5日以降は累計額が示される場合が多くなっている。以下に累計額をグラフで示しておこう。



表コラム6-1 鹿児島新聞義援金高 (著者作成)

新聞社に義援の申し出あるいは送金された期日に即掲載されるとは限らない。というのは紙面掲載するに足る余白の確保、義援額集計などの作業が間に合わない場合もありうるからである。5月末に1万円を若干超える程度の義援高に達している。しかし、すべての義援を県庁に移管した時期、金額などを確認していないが、概ね、3月末段階で一つの区切りを迎えたと推定される。この表で気付くのは2月中旬～3月初旬に掛けて義援額が急に増加する傾向にあることである。この時期は罹災者の移住先がほぼ定まり、移住が開始され始めた時期と重なっている。そうした事態に対する支援の気持ちの高まりが人々の間に見られた結果が反映されたものではないかと推測される。

(2) 東北九州救済会義援

東北九州救済会についてはすでに簡単な紹介をした。この救済会の総裁は総理大臣などを歴任しすでに現役を退き元老の地位にあった松方正義、副総裁は衆議院議長の大岡育造、と東京商業会議所を代表する渋沢栄一である。つまり、官というより、義援の名に相応しく政府を前面に出さずに民間で全国から義援を集めようとするものであったといえる。しかし、その事業経過を『東北九州災害救済会報告書』(大正3(1914)年12月刊行)によってみると、限

りなく官に近い、さらには限りなく官の権威を背景にした義援団体である。

まずは、その趣意書を見てみよう。

1月19日鹿児島新聞一面に掲載された趣意書によれば、

天何ぞ禍を下すの甚たしき東北凶作未だ救はれざるに更に西南の辺り天災を以てせり、抑も東北の地たる元来天恵薄く加ふるに頻年の災禍を来し疲弊困憊を極むるに際し又今回凶作に遭遇す、或は木の実を喰らい或は草の根を執り辛くも飢渴を凌ぎしも今や積雪田野に充ちて更に食なく得るに業なし、吾々傍視するに忍びす有志を図り其餓寒を救済するの計画を為すに当り、突如として桜島大噴火の悲報に接せり、溶岩に埋り熱火に焦され且つ急遽口救に遑なく、親子一朝にして相失ふ惨禍、之より急なるはなし、東北の困憊、西南の災害併せて共に救わざるべからず、即ち普く天下の代表者に訴へ義援を募集して以て此の不幸なる南北の同胞救済の資に供せんと欲す、大方の篤志諸君希は本会の趣旨を諒とし奮って此挙を賛助せられん事を

大正三年三月十五日

総裁 侯爵 松方 正義

副総裁 大岡 育造

同 男爵 渋沢 栄一

以上の趣意書に続いて、義援金1円以上、寄付金配分先を指定すること、義援は指定郵便口座に振り込むことが明記されている。3月30日を締め切りとするが、鹿児島新聞は2月20日までの分については委託金を受け、義援者の氏名を新聞紙上に掲載すると広告している（『鹿児島新聞』2月1日付け、6面）。

そして、早くも1月25日には鹿児島県へ義援金5万円の配分が行われた。

『東北九州災害救済会報告書』によるこの義援事業報告では、3月31日の締め切りを最終的には7月11日を以て事務を終了し、個人25万6千人、団体3万3千口、義援金額総計175万3,400円余にのぼった。

これらの義援金は3回に分けて、北海道、青森、宮城、岩手、福島、秋田、山形の東北諸県と噴火災害の鹿児島県に配分された。また、この年の3月秋田県では陸羽地震による被害を受け、これについても追加の義援が配分されている。

鹿児島県の場合は、義援金4回の配分を受けた。第1回は1月24日5万円、第2回は4月8日7万1千円、5月29日16万4千円の配分を受け、最終の配分として2万5千301円余を受けている。これら4回の配分金を合算すると31万301円となるが、鹿児島県が編んだ『桜島大噴火誌』によれば、同救済会から鹿児島県が実際に受けた受給額は178,837円と計上された（鹿児島県、1927）。この金額の差はなにによって生じたものか現在ところは判然としない。鹿児島県のあげた金額には支給項目の1部が含まれていない可能性もある。

これら各方面から義援は県当局において、被害に応じた配分基準が定められ、配分された。その実際は別項に詳しい（第3章第1節2(3)義援金の分配 参照）。

(3) 新聞メディアの役割

なお、注目しておきたい点は、東北九州救済会の募金活動には当初から新聞社が関わっていた点である。ラジオもいまだない時代の大衆への情報提供メディアとして唯一といってよい新聞は、こうした募金活動に重要な役割を演じた。

そもそも東北九州救済会の発足は1913（大正2）年12月、東北選出の代議士8人と衆議院構内記者倶楽部の記者8名（東京朝日、都、萬朝報、報知、日本新聞、日本電報通信の各社）が東北各県の凶作を救うべく言上げし、一方同年夏ごろから東北の産業振興を目論む実業家グループ（渋沢栄一、益田孝、大倉喜八郎、大橋新太郎、根津嘉一郎）の東北振興会が当面する窮民救済の方策を論じたこととが相呼応して、1914（大正3）年1月早々松方正義を総裁に仰ぎ東北救済会が結成された。この結成会の席上、鹿児島桜島の噴火災害が報じられ、鹿児島も救済対象とすることが決まり、「東北九州救済会」が発足した（『東北九州災害救済会報告書』pp. 2～6）。こうした義援金募集に新聞が果たす役割は当時の貴紳頭官も十分に心得ていたのである。同会が各新聞紙上に掲載した義援募集広告料は総額6万円以上にのぼるが、こうした金額は新聞社の義援として取り扱われている。全国的な規模で集められた災害義援金募集に、当時最大の新聞メディアが果たした役割は極めて大きなものであったことが窺われるのである。

また、義援募集だけではなく、紙上の記事はもちろん、写真によって生々しい噴火の惨状が訴える力も大きかったはずである。鹿児島新聞紙上では、1月噴火写真の広告は早くも1月末には登場している。

1月25日：桜島大噴火絵葉書卸売り、桜島大噴火四切代写真登録出願中、神山写真館

1月27日：噴火絵葉書大販売 始良郡加治木 田中写真館

1月28日：鹿児島新聞記者10余名共、桜島大爆震記 近日出版

2月1日：天覧写真（1尺3寸3分×1尺7分6枚組み）3円50銭、大阪市結城写真館

などが見られる。上記のうち3件はいずれも鹿児島県内だが、最後に上げた大阪での出版は注目される。東北九州救済会など全国区での義援募集には新聞に限らず、質のよい臨場感溢れる現場写真の提供が少なからず世の中の同情を集めるのに寄与したと思われる。

コラム7 災害ボランティアの活躍

桜島大正噴火の時、第七高等学校造士館（七高、現鹿児島大学）の仏教青年会が、今でいうボランティア活動をしたという。『學友會雜誌第二十九號 桜島噴火紀念號』に次のように書かれている。

七高佛教青年會の行動 幹事

一月十二日、あの想像も及ばぬ巨大な悪魔が、忽然として現はれ出で、鳴る、動く、爆く、光る、そして降りしきる灰の中を、家財道具や蒲團を背負ひ、續々と、山の手さして逃げ行く桜島避難民の、惨めな有様を見た時、我々は佛徒として、當に爲すべき事のあるを思ひました。出来る限り氣の毒な人々に力を添へ度いと思ひました。

しかし具體的に、どうしてよいかといふことは、色々考へてみたが、名案が見付からん。それで、會長さんに御相談申し上げた結果とても物質的に彼等を賑はすことは出来ないから、今、困り、悲しみ、不安である彼等罹災者の心を慰め、落ち付かせることが、この際我等の爲すべき最善の策であるといふ考へに、一致しました。

そこで一月廿四、五兩日に亘って、會員有志二十名ばかり集り、七高柔道室、東、西本願寺別院、縣會議事堂、興正寺列院、不斷光院に收容されて居る罹災者を問ひ、交る交る（原文はくの字）慰安の言葉を述べ島員喜捨の菓子を施與し、そして最も多數收容されて居る、東、西、興正寺別院と不斷光院では、蓄音機をならして慰めました。毎日あの恐ろしい、轟く響きばかりを聞いてみた彼等が、色々の優しい音楽をきいて、十幾日目かに顔に浮べた喜びの色、菓子を貰って有難がる聲、我々の心も共に喜びました。殊に罹災民總代として、感謝の挨拶をした人の、驚くべき雄辯と、眞情溢るゝ力ある言葉には、我々が却って感動されました。＜後略＞

今でいう PTSD（心的外傷後ストレス障害）のケアをしたことになるだろう。

一方、医療救護班も来た。九州帝国大学（現九州大学）医学部の眼科医局の医師1名と医学生2名の計3名が先達として現地入りし、その進言を入れて、その後、学部長命により外科医と内科医が加わった。最初に眼科医の内田孝蔵が福岡日日新聞の「鹿児島市全滅」との号外を見て、降灰で眼を痛めているのではと考えたという。先遣隊は国分駅を少し行った小さな駅（重富駅？）で降ろされ、そこから鹿児島まで歩いたとのことである。外科医の飯島博医師の記載によると、打撲、骨折、擦り傷など軽傷が多かったようだ。

なお、内田はその後上京して東京駅前に丸ビル眼科を開業した。開業して20日後、あの関東大震災に遭遇したという。早速、翌日早朝には東京駅前の空き地でいち早く診療に当たったが、これには桜島での経験が非常に役立ったとある。この震災救護班のことを「これが當事の救護班の嚆矢であった事を特筆して置き度い」と誇らしげに述べている。（『大正三年桜島噴火探検二十五周年追憶記』による）

コラム 8 桜島大正噴火関係記念碑

桜島大正噴火は、わが国が 20 世紀に経験した最大の火山噴火であったが、同時に、地域にとっても大事件であった。この教訓を後世に残そうと各地にさまざまな記念碑が建てられた。「爆発記念碑」「移住記念碑」「改修記念碑」と名称はいろいろある。現在知られているものだけで計 48 個ある。

最も有名なものは東桜島小学校校庭のいわゆる「科学不信の碑」であろう。「理論に信頼せず」異変を察知したら速やかに避難することと、将来に備えて勤儉貯蓄することを訴えている。これは本文に触れたので割愛する。他は、いくつかに分類される。噴火の客観的事実を述べ、避難が肝要とするものが多い。中には、鹿児島市郡山町常盤のように、津波のデマに惑わされて、鹿児島市民数千人が村を通過し、村民の中にもそれに従って避難した者もいるが、村には何の被害もなかったと述べ、付和雷同を戒めたものもある。

移住記念碑は切実である。噴火の事実だけでなく、その後の開拓の艱難辛苦を伝えようとしている。とくに、国有林で山間部が多かったから水には大変苦勞したようで、谷川へ水汲みに行く女子供の労働は大変だったらしい。水道開通が切望されていたようで、錦江町桜原の「桜島爆発移住記念碑」には「水道記念」という文字も刻まれている。水道開通記念碑と対になっているところも多い。また、転売を恐れたのか、土地は県有地のままとし、開拓が終了してから、ようやく個人に所有権が移された。垂水市大野原の「土地所有権移轉記念」碑はその喜びを表している。

鹿児島湾の北部沿岸では噴火に伴って地盤が沈下した。そのため干拓地や塩田に浸水があったり、漁港の護岸が決壊したりした。そこに夏、台風に伴って高潮が襲い大きな被害を出した。その修築記念碑もいくつかある。

大隅半島にも莫大な降灰があり、その結果、10 年近く土砂災害や水害に悩まされ続けた。やっと堤防の修復が終わったと思ったら、また土石流に見舞われ、賽の河原のような繰り返しが行われたらしい。串良川沿いに、こうした河川改修や堰の改築に関係した記念碑が 8 つもある。



写真コラム 8-1 桜原の桜島爆発移住記念碑



写真コラム 8-2 小村新田の堤塘竣工記念碑

コラム 9 新設尋常小学校のその後

溶岩や降灰により家だけでなく土地まで失った人たちは、各地に移住せざるを得なかった。当然、子供たちも含まれていた。移住指定地は国有林の原野がほとんどだったので、近隣には学校もない。通学には険しい山道を何キロも歩かなければならなかった。それも不可能な僻地には尋常小学校（現在の小学校）が新設された。噴火の当年中に開校したのが、南大隅町大尾の大中尾尋常小学校と西之表市中割の鴻峰尋常小学校の2つで、垂水市大野原の大野尋常小学校は翌年6月16日開校した。

しかし、現在でも子供らの元気な声が響いているのは大中尾小学校のみで、大野小中学校は2006（平成18）年に廃校、鴻峰小学校は2001（平成13）年に休校となった。いずれもご多分に漏れず過疎と高齢化が原因である。父祖たちが血と汗で切り拓いた土地である。住民はどのような思いで、この事態を受け止めているのであろうか。



写真コラム 9-1 大野小学校 80 周年記念碑

大野小中学校の創立 80 周年記念誌のタイトルは『開拓魂』である（石碑も開拓魂）。校歌にも「噴く島岳にゆかりもつ 山はわれらが新天地 望みは高くおおらかに からだとわざをきたえつつ みんな楽しく大野校」とある。移住者たちの意気込みと希望が伝わってくる。それが今は…。

種子島の鴻峰小学校は既に9年間も休校中である。校庭の鉄棒や滑り台は錆びて腐っていた。しかし、住民たちは絶対に「廃校」と言わない。校庭には雑草もなく、花壇には花が咲き乱れているし、校舎に入ると、児童の絵がそのまま飾られ、きちんと清掃されている。元用務員さんが近所にお住まいで、住民と一緒に維持しておられるとのこと。若い住民が増え、学校が再開されるのを待ち望んでおられる気持ちが痛いほど伝わってくる。ここの校歌にも「黒潮しぶく南の 種子島の頂きに 大正三年の噴煙で 礎なりし学び舎は 希望の光映える窓 われらの誇り鴻峰校」とあり、やはり桜島が唱われている。聞き取り調査に訪れた日には天然記念物ヤクタネゴヨウの大木が繁り、桜が咲いていた。住民の願いが叶う日が一日も早く来ることを祈る。



写真コラム 9-2 鴻峰小学校